

銅像建立の由来

銅像建立100年2022年（平成34年）を迎えるに当たり、その当時の日蓮宗管長河合日辰猷下が記された靈感略記を現代風の言葉も交えさせて頂き多くの方に真言宗時代に銅像が建てられる経緯をご紹介させて頂きます。（裏面に記載）



当時は、明治維新以後の廃仏毀釈の嵐の中で、往年の清澄寺の権威は次第に薄れ経済的にも斜陽を啣たざるを得ない大正時代のことであります。

銅像建立以前の清澄寺の山内には、題目の法鼓は一步も入ることを許されませんでした。しかし、この日蓮聖人銅像建立の浄業完成の後には、真言宗清澄寺第三十世玉瀧僧正は、旧慣を一新され、四月二十七日・二十八日と十月二十七日・二十八日の両聖日を日蓮宗に全山解放されるという大度量を示されました。四月は立教開宗会・十月は宗祖御会式として日蓮宗管長御親修の大法要が旭が森を中心に行われることになり、周辺一帯の整備が進み、全国から人々がこの山に雲集し法華の題目が清澄の老杉に木魂して清澄山は一変して活況を呈することとなり、これを契機として改宗へと進み始めたのであります。（清澄寺改宗秘話より抜粋）

当山はこの改宗につながる大事な銅像建立100年の慶事をなんとかお迎え致したく旭が森整備等も含め宗務当局と話を進めて参りたく存じます。

執事長

『御銅像建設發起靈感略記』

ああ悦ばしい哉、時至り機熟せり。既往の先師らがこの旭が森に立正の誌を立てんと欲するや久しさまざまな苦勞や困難があり泣を為すのみ

然るに大正八年八月某日 當山虚空藏菩薩、夢となくうつつとなく恍惚の間に日辰に告げて云く。「私は日蓮聖人に授くるに智慧の宝珠を以てした。しかるにこの智慧たるや大覚世尊にもうして諸佛の智慧を授与せり 聖人はこの智慧を以て権實二教を判釈し 権を捨てて實に入ることが出来た 是れ実に時機相應の弘教なり それは聖人をして此の如くしたものは私が法華經の法味をなめんと欲するが為なり そうでなければ何で彼に権を捨てて實に入るの智玉を授けるであろうか 此の故に私が欲する所のは唯法華經の法味のみ しかしながら私は此の法味

を受けざること年月有り 故に力を失うて吾が山をたもち守ることが出来なくなってきたる 願わくは上人来たつて法華經の法味を授與し そして當山を莊嚴し聖人の事蹟を發揚せんことを」

とお告げを頂いた しかしながら耳に在りしかども繁務の故を以て清澄に來詣することが出来ず今日に至れり しかし大正十一年五月また靈感あり故を以て本年六月二十九日 河合慈孝 大橋望隆 大塚圭八を供に出發して三十日朝當山に登り 先ず虚空藏菩薩に前約の如く法華經の法味を捧げ次に妙見堂にお詣りしその後 まさに明星池に臨まんとする時、偶然に一老僧とお会いして旭が森に導いてもらった その折になんとも銅像建立の話に及んだ 是れ実に我同判の大塚圭八なる者なり。その老僧は兎玉妙開なる者なり

日辰もまた河合慈孝 大橋望隆とともに此れに賛同し互い力を合わせ浄業の完成を誓う 此に於いてか兎玉妙開この事を當山貫首玉瀧義秀師にはかる 玉瀧師これを聞いて大いなる喜び東京に來て日辰を大塚に訪ねる

しかしながら日辰不在なり故を以て後日を期し清澄山に帰れり。その後、八月三十一日來京して立正護国会樓上に於いて始めて日辰に會う

一日あつて親子兄弟の如し心情甚だ密なり。そして玉瀧師より日辰に向かい發起者足らんことを求む 日辰も又一大事の故を以て敢えて辞せず。玉瀧師又云く、「日蓮聖人は吾が先師の弟子なりそれは私に於いても甚だ深き法縁なりいかでか之を棄置して可ならんやこの故に日辰管長發起者たるを諾したまわば私は即ち犬馬の勞を取ります」と 上來の事由に困つて之を觀れば則ち 日辰は眞の發起者にあらず眞の發起者は 兎玉・大塚の如し、然るに此の二人も又眞の發起者にあらず 其の意味合ひ

とすれば もし虚空藏菩薩恍惚の間に示現して日辰に告げずんば即ち日辰此の山に登らず、若し日辰此の山に登らずんば即ち兎玉・大塚相値うによしなし 故にすべからく此の虚空藏菩薩を以て眞實の發起者となす所以なり。

南無妙法蓮華經
維時 大正十一年九月十四日

靜照院日辰 謹識

發起人

大本山妙顯寺住職

大僧正 河合日辰

清澄寺住職

中僧正 玉瀧義秀

海軍中將

子爵 小笠原長生

海軍中將

左藤鐵太郎

宮崎庄太郎

渡邊長男

大塚圭八

顧問

海軍大將元帥

伯爵 東郷平八郎

日蓮宗管長

大僧正 神保日慈

(次号は完成までの経緯を紹介し